

住居の変容に関する研究

－ 来間島を事例として －

Keywords

伝統的間取り 神 モノ
来間大橋 移住者 離島



K08004 荒蒔 桃子

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

日本はかつて鎖国状態にあった。限られた国のみとの交流の結果、日本独自の文化や生活の仕方が強く根付いていた。日本の鎖国体制が終焉を迎えたことで、様々な国と交流を開始し、文化的にも経済的にも急成長していくこととなった。

本研究で対象とした来間島は、宮古群島の小さな島である。かつて宮古島へ行く唯一の手段は船だったが、海が荒れると船を出す事は出来なくなり、外部から隔絶されていた。まさに“離島”状態となっていた来間島には、鎖国状態にあった日本のように、独自の文化が形成されていた。1995年、宮古島との間をつなぐ来間大橋が開通し、それまで船で行っていた農作物の出荷や買物も、全てがこの橋を通して行われるようになったことで、来間島は“離島”状態から脱したのである。

この橋が出来る直前、畑研究室で行われた、来間島の住居空間に関する研究がある。当時は離島の特性である閉鎖性が強く残り、外部からの直接的な影響を受けていなかった。住居空間は、昔からある伝統的な間取りの構成を変えることなく、建替えや増改築が行われていた。

当時の研究からおおよそ17年が経過した。その間に、来間島の人々にとって、来間大橋はあたり前の存在になったと考えられる。そのため閉鎖性も薄れ、外部からの影響も少しずつ受けるようになったのではないだろうか。本研究では過去の研究から人々の住居空間がどのように変容したのかについて、実測調査やインタビューを通して探っていく。

1.2 研究方法

本研究は2011年7月26日から8月10日までの17日間にわたり、沖縄県宮古群島にある来間島での現地調査で得た資料と1995年の先行研究の資料を基に分析・考察を行う。現地調査では、住居空間、屋敷空間の実測調査と、島民へのインタビュー調査を実施した。

2. 調査地

来間島は、沖縄県宮古島の南西 1.6km に位置する島である(図 1)。周囲は約 6.5km で島の北東側は断崖になっている。今回調査する集落はこの断崖の上から南西方向へ

の緩やかな斜面の上に立地している。現在約 80 世帯、170 人程の人が生活しており、その中には本島から移住してきた人々もいる。

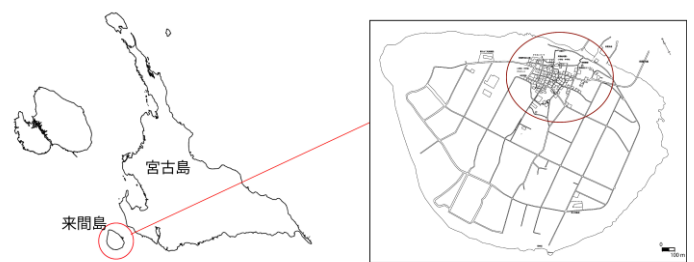


図 1 調査地の位置

また、最近では来間大橋が開通したことで観光客が多く島へ訪れるようになったため、観光客へ向けた飲食店や土産物屋もいくつか存在している。



写真 1 来間大橋

3 伝統的住居空間

3.1 民俗方位観

来間島には民俗方位観が存在する。私たちの使用している自然方位の北東が来間島では北となり、磁北とは45°ずれて考えられている。また、この民俗方位観でいう東側は「日の上の方角」＝「神の訪れる方角」であるとされ、神聖とされている。

3.2 住居空間

過去の資料より、来間島の伝統的な住居空間は図2のよ

うに示される(図2)。

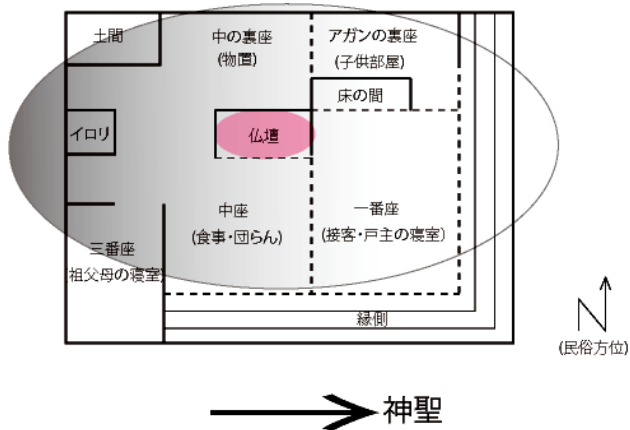


図2 伝統的住居空間

住居内部は、タナと呼ばれる先祖の魂を祀る場所(仏壇)を中心に構成されている。非日常時に客人を招く部屋である一番座は神聖な方向である東側に配置され、反対に炊事場などの日常的な空間は西側に配置されている。

3.3 屋敷空間

伝統的な屋敷空間は図3のように示される(図3)。

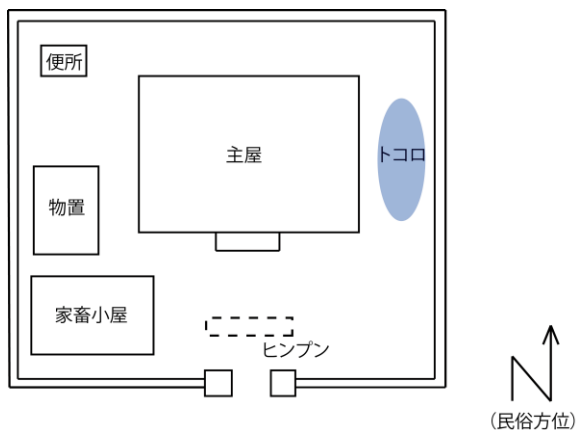


図3 伝統的屋敷空間

主に主屋、便所、物置小屋、家畜小屋で構成され、主屋の東側には「トコロ」と呼ばれる屋敷の神を祀る場所が存在する。トコロは、家族や家のことについて祈る場所であり、毎月旧暦の1日に酒や供え物をする。

4. 祭祀集団

4.1 ブナカ

ブナカとは、島の創成神話に関わる3兄弟を始祖とする伝説に根拠を持つ社会集団である。長男家をスムリヤーブナカ、次男家をウプヤーブナカ、三男家をヤーマスヤーブナカといい、集落の人々は必ずそのどれかに属している。島へ移住してきた人も同様である。普段の生活でブナカはあまり意識されていないが、後述するヤーマスという祭りの際はブナカごとに分かれて行われる。

4.2 ヤーマス御願

ヤーマス御願は、子孫の繁栄を祈願して旧暦9月のキノ

エウマの日と翌日に行われる。島で一番大きな御願で、この日には島外に住む親族達も集まり、島全体が賑やかになる。第1日目はブナカごとに本家に集まり、前年の祭の日から、その日の間に生まれた子供、当年21歳に達した若者をブナカの一員とする祈りが行われる。2日目には、ブナカごとに踊りなどの余興が用意され、島をあげてのお祭りが行われる。

5. 来間島の住居

5.1 住居の分類

正確な建設年代が不明である借家1軒を除き、39軒を住居が建設された年代ごとに分類する。島民の生活に変化を与えた要因と考えられる来間大橋が開通した1995年3月を区切りとして、それ以前と以降に分けると、それぞれ26軒、13軒となる。さらに、建設した業者ごとに分類すると以下の表で表される(表1)。

表1 建設年代、業者ごとの分類

	島内	島外	不明
1995.3以前	18軒	5軒	3軒
1995.3以降	1軒	12軒	0軒

5.2 増改築の有無

1995年3月以前に建設された住居26軒に関して、増改築の有無での分類を行うと、改築ありの住居は26軒中15軒で、ほとんどの住居が島外の業者へ依頼し、行ったことがわかった。

5.3 要因

以上のように分類していくと、新築・改築問わず年代が新しくなるにつれ島外の業者へ依頼している住居が増加している。これらの要因について考えられるのは、島民の高齢化による人口の減少と、来間大橋の開通である。

島民の高齢化によって大工職に従事出来る島民や若者の減少、それに加え来間大橋が開通したことで、宮古島の業者との交渉が容易になった。ここからも、島民の住居や生活に島外の影響がもたらされてきていることがわかる。では実際にどのような変容があったのだろうか。そのことについて考える上で、今回調査した来間島の住宅を以下の3つのグループに分類する。

●グループA：1995年3月以前に建てられた住居で、増改築の行なわれた住居

●グループB：1995年3月以前に建てられた住居で、増改築の行なわれていない住居

●グループC：1995年3月以降に建てられた住居

以上の3グループごとに分析を進めていく。

6. 住居の変容

6.1 グループA

グループAに関しては、1995年の図面と今回の調査で得た図面との比較を行い、躯体にあった物理的な変容、モノの変容を調査する。グループAのうち、過去の資料

が残っている住居は12軒、今回実測の行えなかった住居は4軒あったため、比較することの出来る住居は10軒となった。

一例として住居No.48の例を記す。

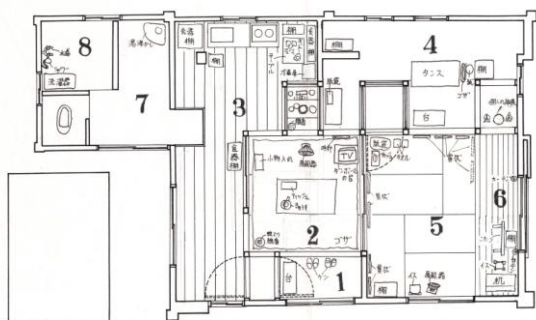


図 4 住居No.48(1995年)



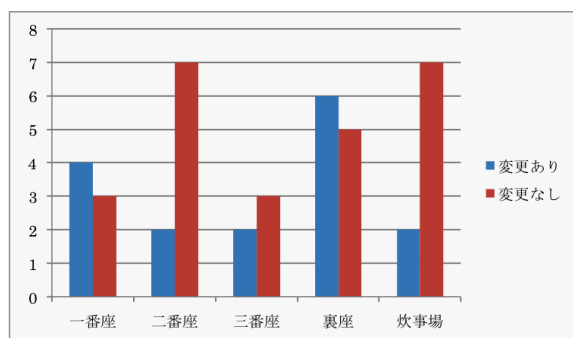
図 5 住居No.48(2011年)

点線部分が消失した箇所、実線が増加した箇所をしめしている。モノの変容の点から比較をしてみると、以前は神棚が置かれていた箇所に壁ができ、神棚が住居の中心へ移動したこと、円で示した箇所にモノが多くなったことがわかる。これにインタビューシートから得られた情報も含め、部屋の使用用途の変容についても比較した。

以上のように、他の住居に関してまとめていくと、改築の行われた住居の中で間取りに変容のあった住居は9軒で、風呂場やトイレ、炊事場など水回りの改築が多いことがわかった。残り6軒は窓や床など、間取りへ直接影響しない改築であった。

用途の変更があった部屋は以下の通りである(グラフ1)。

グラフ 1 部屋の用途の変更箇所



炊事場や二番座は用途の変更が無い例の方が多くなっている。二番座はテレビや大きなテーブルがどの住居でも見られ、食事や団らん、接客のスペースとして使われている。また、仏壇を二番座に置く住居が多くなっている。炊事場には動かしにくいコンロや流しなどが置かれ、食事を用意することが主な目的の空間である。つまり、この2つの部屋にはその場所から動かしにくいモノが存在する。そのため、部屋の用途が変わることはほぼ見られない。しかし、変更があった例としては、炊事場を広げ、食事をする空間を同じにしたものがあった。

一番座と裏座は変更ありとなしの例が同じ程度あった。これらの部屋の用途としては、寝室や物置として使われていることが多い。一番座はモノが少なくスッキリとしていることが多く、あまりものを置かないようにしている。反対に裏座は物置としての意味が強く、モノが多くなった。また、隣の部屋と同化して裏座が存在しない住居もあった。

最後に三番座である。三番座はもともと無い住居が多く、変更ありが2軒、なしが3軒となった。変更のあった例は、炊事場と同化させたものと、逆に物置として新たに造られた例があった。

6.2 グループB

グループBについては、生活の変容を中心としてグループAと同様に分析を進める。グループBで、過去の資料のある住居は7軒、今回実測の行えた住居は7軒であり、比較することの出来る住居は4軒となった。資料が片方のみの場合は、過去と現在で分けモノの傾向について分析する。

グループBの多くの住居は居住者が変化している。子供が大きくなり離れて生活するようになった例や、反対に子供が島へ戻り親と一緒に暮らす例があった。

次に、過去と現在の各部屋でモノを見ていく。二番座にあたる部屋には必ず仏壇と大きなテーブルがあり、テレビや電話を置いている住居も多く存在した。次に三番座に関しては置いてあるモノに共通点はあまり見られなかったが、物置として使われている、もしくは存在しなかった。二番座と三番座に関しては、過去も現在も用途に変容はなかった。

東の裏座にあたる部屋には大抵の住居でダンスが置かれ、衣類などを整理している。現在も同様のものが存在していたが、それに加えて現在では布団やベッドが置かれることが多くなり、寝室として使われている。

全体的に用途やモノに関して大きな変容はみられず、居住者が変わっても、住居の使い方に変わりはないようである。しかし、家電製品や使用しているモノが新しくなっていた。

6.3 グループC

グループCでは、建替えが行われた住居の新旧での比較や、移住者と島民の住居に関する考え方の違いなどについて分析する。建替えが行われた住居は7軒あり、過去と現在との資料が得られた住居は4軒である。

建替えの住居では、高齢になったことで足腰が弱くなり、2階建てから平屋へ改築した住居や、住人の数が増え平屋から2階建てにした住居、間取りを大きく変更し収納を増やし間取り自体はシンプルにした住居、間取りに大きな変更はないがひとつひとつの部屋を広くした住居などあった。居住者の変容では、親から子や孫が引き継いでいる例の他、他人同士で生活している例があった。全ての住居で居住者が減少しており、このことが建て替えにも影響していると考えられる。

次に来間島へ移住してきた住居5軒についてみる。うち2軒はインタビュー、実測ともに出来ず、残りの3軒はインタビューのみ行うことができた。

移住してきた人々は全てブナカに属しており、お世話になった人など、縁のある人のブナカに入れてもらう。島の行事などには積極的に参加する人と参加しない人で分かれたが、島内では人との繋がりが強いので、行事ごとには参加した方がなにかとよい。また、子供が島の小中学校に通っている場合は島をあげての学校行事などもあるので、行事には参加することになる。

仏壇はまだ家族内で亡くなっている人もいないため、つくられていない。火の神、個人の守り神に関しては、存在は知っているが持つてはいないようである。

7. 分析と考察

7.1 伝統的間取り

建替えられた住居の間取りをみると、伝統的な間取りの考え方が薄れているということがわかる。

建替えや増改築の一番の要因は台風である。台風に堪えられる強い住居をつくりあげる過程の中で、自分達の住みやすい住居にしたいと考える人々が増えたのではないだろうか。伝統的な間取りにとらわれず、自分達のための住みやすい住居に変わっているのである。

しかし、神聖な空間としての一番座の概念は少なからず残っている。休憩をしたり、洗濯物を干したり、日常的に足を踏み入れる部屋である反面、モノが少なく、すぐに片付けられるようになっており、急に親類などの客人が訪ねてきても対応が出来るようにしている。インタビューからも、この空間に通すのは親類や大切な客人で、近隣の人々は二番座、もしくは玄関で対応することが多かった。このことから、この部屋は大切な人の為に常に空けておくことになると考えられる。

7.2 神の存在

来間島には神が存在し、長い間島民達に信仰され、重要な意味合いを持つものとされてきた。それは集落内にある重要なウタキが、限られた人、期間にしか入ること

の出来ない神聖な場と考えられていることにも現れているし、伝統的な住居の間取りの中にも現れている。

昔から来間島に住んでいる島民の住居には、必ず仏壇がつくられていた。仏壇には先祖が祀られ、常に住居の中心にあった。伝統的間取りの概念が薄れてきたことに伴い、必ず中心へ来ることは無くなったが、玄関から入ってすぐの場所には必ず置かれている。同様に炊事場には火の神、個人の守り神は寝室などの個人のスペースに祀られている。

しかし、島外から移住してきた人の住居ではこれらの神はみられない。存在を知っている程度である。

来間島の人々にとっての神と新しく島へ来た人々にとっての神についての考え方では大きく差がある。来間島の人々は長い間神の存在を近くに感じ、自分の親から引き継ぎ、当たり前ものとして生活をしてきた。それに対し移住者側からすれば、まだ身近なものとして考えられていないことが感じられた。

これからも神の存在は来間島の島民へ受け継がれていく。移住者にとっても、生活していく中で序々に当たり前ものになっていく可能性がある。

7.3 モノ

モノに関してはどの住居でも多くなったが、増えた割には表に見えるものは少ない。新築する際にははじめから収納を付けたり、使わなくなった部屋を物置にすることで、訪れる人々の目につかないようにされている。しかし、表からは見えにくい裏の空間にはモノが溢れていた。

また、多くの住居で大きなテレビなどの新しい家電製品が設置されていた。来間大橋が開通してから、簡単に買物をする事が出来るようになり、新しいものなども比較的早く流入するようになったと考えられる。

8. おわりに

来間大橋の開通から17年、その間に来間島の島民の生活にも住居にも、確かな変化があった。それらに共通するのが、来間大橋と、島外の人々の存在である。

橋の開通によって、悪い影響もあったが、島民は誰一人として橋の存在を否定しない。それは、船を使わなければ島から出られなかった時と比べて、圧倒的に便利になり、外の町が近づいたからではないだろうか。

島民の生活はこれからもっと豊かになり、住居の形式も変わるかもしれない。しかし、変わらないものも存在するだろう。伝統的な考え方や島民にとって大切な存在は、代々受け継がれていくことでずっと変わらずに残っていくはずである。

参考文献

- 1)「来間島の屋敷構えの構成法とその使われ方」. 野上公久、畑聰一、丸地弾、田中潔 社団法人日本建築学会 1995年
- 2)「夢を架ける」, 大浦徹, 2000年
- 3)「来間社会の二元的構造とブナカ- 村落祭祀とヤーマス御願-」, 森謙二